

ふつうに生きることの難しさ
—ケネス・レクスロスの教え

奨励	田口 哲也【たぐち・てつや】
奨励者紹介	同志社大学文化情報学部部長 同志社大学文化情報学部教授
研究テーマ	日本と世界の文化を学び比較する

イエスに触れていただくために、人々は乳飲み子までも連れて来て。弟子たちは、これを見て叱った。しかし、イエスは乳飲み子たちを呼び寄せて言われた。「子供たちをわたしのところに来させなさい。妨げてはならない。神の国はこのような者たちのものである。はっきり言っておく。子供のように神の国を受け入れる人でなければ、決してそこに入ることはできない。」

(ルカによる福音書 18章15—17節)

ケネス・レクスロス
という詩人

皆さん、おはようございます。すばらしい讃美歌、聖書朗読、祈禱を聞かせていただきまして、心がきれいになりました。ふつうに生きることの難しさというのが、どういうことなのか。本日私がお伝えしたいことの一つで、もう一つは、ケネス・レクスロスさんという1982年にお亡くなりになったアメリカの詩人ですが、この方と同志社のつながりを少しお話しさせていただきたいと思っております。

レクスロスさんという方は、20世紀を生きた方です。子どものころから日本文化が大変好きで、当初はシカゴで活躍した方ですが、若いときに西海岸に移りました。西海岸には日系の移民がたくさんいたため、東海岸とは全く違う文化を見て、東洋に対する憧れがさらに強くなったということです。これは多くの方が当時、似たようなことを感じています。1950年代のアメリカは経済指標などを見ますと、空前の物質的豊かさに恵まれた時代で、しかし片方ではマッカーシズムという、魔女狩りのような現象がありまして、これはアメリカ人にとって大きな傷となったことでありました。そのときに物質的な豊かさだけで人間は本当に幸せになれるのだろうかということで、多くの方が真剣に悩み、そのなかで東洋の文化、特に中国、当時は冷戦下の共産中国であり、アメリカ人はなかなかそこに入れないということで、全東洋の文化を、ある意味で保存している日本にやってきたということです。ゲーリー・スナイダーという、ピューリッツァ賞を何度も受賞したアメリカの有名な詩人がいます。この方は、相国寺で7年ぐらい修行され、アメリカに戻って自分で禅寺を開かれました。スナイダーさんは、同志社女子大学元学長の児玉実英先生と親しく、児玉先生から聞いたところ、スナイダーさんは、レクスロスさんの前では「イエス・サー」と言うほど、大先輩だということで非常に緊張して接していたということでした。

レクスロスさんは、日本文化に精通しており、日本語も自分で勉強して辞書を引きながら日本の王朝文学、与謝野晶子、新しいところでは白石かずこさんあたりまで、たくさんの翻訳をされ、New Directions社というニューヨークの出版社から出版されました。当時は大変な人気でアメリカの学生の間でよく読まれたということです。Leza Lowitzさんという映画批評家が日本文学に転じたきっかけが、もともとニューヨーク市立大学の映画学科で勉強されていたのですが、レクスロスさんの詩集One Hundred Poems from the Japaneseを読んで生き方を変えて日本にやってきて日本文学を勉強したというエピソードがあります。

レクスロスの生き方

レクスロスさんは、アメリカ政府の派遣で1年日本に来られたとき、「無賓主庵」で1年間すごされたそうです。この建物は、ゲストもホストもないという意味で、お坊さんが命名されました。古い日本家で、現在は今出川キャンパスにあります。当時は泉涌寺に近いところにあり、ドナルド・キーンさんなど有名な方もここでお住まいになったということです。児玉先生のご協力を得まして2005年に、そこで生誕100年祭をして、東京からもたくさんの方がおこしくされました。その時の様子は、児玉先生が京都新聞に記事をお書きになりました。

このレクスロスさんはもともと熱心なカトリックの信者でした。特にバルト神学の影響を受けて人間の心の問題、近代、現代、過去の詩をどのように応用していったらいいかということで、一時、日本の真言密教、立川真言などに傾倒してキリスト教から離れていた時期もありますが、最後は司祭を呼んでカトリック信者としてお亡くなりになったということです。大変な平和主義者で、親日家ということで知られており、戦争中、「自分たちは戻ってくる」と信じていたカルフォルニアの日本の移民の方が強制収容所に連れて行かれるときには、当時サンフランシスコに住んでいたレクスロスさんのお宅に大事なものを預けていったということです。日本人の方のいろいろなものを家の中に保存され、なかでも一番困ったのは、大きな仏壇で保管が大変だったという話を聞いたことがあります。

キット・カット・ディ

レクスロスさんは私が大学院の時に何回目かの来日をしていました。個人的に毎日のように指導を受けた先生で、レクスロスさんのもう一人のお弟子さんで、私の兄弟子のような方になるのですが、ジョン・ソルトさんという方がいます。北園克衛という日本のアバンギャルドの研究をされた方で、カルフォルニア大学サンタバーバラ校時代の教え子ということで。昔、北園克衛さんのことを苗字の前と名前の前をくっつけて、Kit Katと呼んでいたそうですが、エズラ・パウンドという有名な詩人が最初にそう呼んだそうです。Kit Kat Dayというのが日本にありまして、偶然なのですが、6月6日は、レクスロスさんと北園克衛さんがお亡くなりになった日です。この二人は長く手紙のやりとりをされていて、レクスロスさんが日本にこれたときには会うというほど大変友情が篤かったということで、ソルトさんと私は相談して、これから毎年6月6日は、このお二人のことを忘れないようにメモリアルをやらうということになりました。サンタモニカにビヨンド・パロックという詩の朗読会などが行われるイベント会場があり、そこで関係の方が集まりまして、お二人のことを偲び催しが行われました。2013年のことです。

人間として成功せよ

あるときレクスロスさんがソルトさんに語られた話を聞きまして、私自身も感銘を受けたことがあります。ソルトさんが、サンタバーバラ校で勉強していたころの話です。若いときは誰もがいい意味でアンビシャスになりがちですが、そういった若者たちにレクスロスさんは静かに、「人間にとって最も大事なものは、たとえば文学者として成功したとか、投資家として成功することではなく、自分の愛する者を大事にすることだ。成功は自然にやってくる。successful poetになるよりも、successful human beingになれ」と言われたそうです。それを素直に受け取ったソルトさんもすごいと思いますが、こういうことを言う力は、レクスロスさんが、長く、人間の悩み、人間の生き方についての宗教的な深い洞察のなかで達せられたことだと思います。

凡人と偉人の区別は難しいのですが、ドストエフスキーの『罪と罰』というのは最初にラスコーリニコフという主人公が、偉人と凡人の違いについて考えるシーンから始まります。ナポレオンなどの偉人は人をたくさん殺しても非難されずに偉大な人だと称賛されている。とすると、ひょっとしたら自分が偉人であるかどうかは人を殺してみればわかるのではないかと、むちゃくちゃな論理ですが、金貸しの老婆を殺しても誰も困らないだろう。人を苦しめている高利貸しですから、しかも寿命があまりない老婆ということで、コートの中に潜ませた斧で頭を叩いて殺す。長い間、この話は日本人の心をとらえました。終戦直後ということもあり、『罪と罰』を多くの方が読みました。たとえば椎名麟三さんも、ロシア文学の影響を受けた一人です。そういうことを昨今、日本人はあまり考えなくなったと思います。私自身もそうですが、日々の忙しさのなかで自分にとって一番大切な人は誰なのかということのを忘れがちになってしまう。そのときにレクスロスさんの“Be a successful human being”という、トップになるかならないかではなく、自分を支えてくれる人、自分とお互いに愛し合っている人を大事にすることが人間にとって一番重要なことではないかということです。

奇蹟をおこすには

では、有名になるよりも、心やさしい、自分の周りや自分の生きている環境がよく見える人間になるためにどういうことをすればいいのでしょうか。日本発で世界的に広がったアバンギャルドの芸術としては唯一のものと言っても過言ではない暗黒舞踏という芸術があります。それを始めた土方巽さんという舞踏家がおられます。土方さんの奥さんは、元藤燐子（あきこ）さんという方で、土方さんと一緒に苦労して暗黒舞踏のジャンルを確立された方です。数年前にお亡くなりになりましたが、最後まで病床で踊っていたという方です。京田辺キャンパスでは昔、外国文化週間があり、元藤燐子さんを招いて、多目的ホールで舞踏の公演をしていただいたことがあります。元藤さんは豪快な方で京田辺校地に来ると、「大きな竹がある。あの竹を使って舞踏をしたい」とおっしゃり、施設課の職員がノコギリで竹を伐ってくれ、その竹を使って舞踏をされました。そのときは多目的ホールが超満員になり、我々も感銘を受けました。言葉は一切発せず、身体、特に上体だけで自分の考えや感情を伝えるという芸術なのです。そのときに身体に障がいがあり、車椅子でご覧になっている方がいました。視覚も聴覚も厳しい状態で、普段は光にわずかに反応するくらいの方だったのですが、元藤さんが感情を込めて踊っていると、その女性が涙をぼろぼろ落とされました。我々も非常に感動しました。

身体の中にある強い信念と深い愛情は隠すことはできないもので、外側だけの素振りではなく、内面から身体に浮かびあがってくるような表現力をおもちだったことにより、その内面を障がいのある方に伝えられたという、奇蹟に近い出来事であり、いまだに非常に強く心に残っています。そういう奇蹟が起こることは本当にあるのだなと強く感じ、その基本に

は人間が単なる上昇志向とか、物質的な豊かさのみに目をとられるのではなく、生きとし生けるもの、生命あるものがお互いに心を交換しあうことが、物質的な喜び以上のもっと大きな喜びであることを、そのとき学ばせていただいたということです。

我々、特に日本人は絶対者をあまり意識しない民族なのかもしれませんが、人間の力というのはごくわずかなものであって、下手をすると傲慢になりがちな人間の心をもう一度見つめ直して、謙虚に他の人と接するということを常日頃行うためには、どの宗教でもこのような静かな礼拝や集会に時々参加し、それによって新しく生きていく力を獲得していくことができるのではないかと、このごろ特に強く感じるようになりました。本日は若い方も来ておられます。若いときからこういうことを身につけることは大変なことだと思いますが、時々振り返って、人間は一人で生きていくことができない弱い存在であり、互いが支えあうことによって初めて幸せな生活を送れるということを、もう一度、確認させていただくということで、本日皆さんにお話をさせていただきました。ありがとうございました。

2013年10月30日 同志社スピリット・ウィーク秋学期
京田辺水曜チャペル・アワー「奨励」記録